

高温等に伴う農作物管理対策について

気象災害対策R 5－8
令和5年 7月31日
農林総合研究センター

I 気象概況

気象庁発表の1か月予報（令和5年7月27日14時発表）及び高温に関する早期天候情報（令和5年7月31日14時30分発表）によれば、向こう1か月の気温は高く、特に期間の前半は太平洋高気圧に覆われ、8月6日頃からも引き続きかなりの高温が見込まれています。

今後の気象情報に注意するとともに、地域における水利用の状態を継続的に把握し、農作物の管理等に留意してください。

なお、熱中症の危険性が高い状態が続きますので、ハウス内やほ場での作業時には飲料水や日陰となる休憩場所を十分に確保するなど、熱中症対策を行い、健康管理を徹底してください。

II 農作物の管理対策

1 水稻

- （1）現在、早生は登熟中期、コシヒカリは出穂始期となっており、稲が最も水を必要とする時期である。このため、稲体が水分不足にならないように注意して水管理を行う。特に、強風や高温（フェーン）時には、あらかじめほ場に入水しておく。
- （2）乳白粒及び胴割粒の発生防止のため、通水の間隔を短くして土壌の飽水状態を保つ飽水管理を刈取り直前まで実施する。なお、できるだけ夕方からの通水とし、日中高温時の長時間の湛水は根の機能が低下するので行わない。
- （3）用水をため池等に依存している地域では、集落や地域単位で限られた水源の計画的な利用に努める。なお、関係機関との連携を密にし、ため池の状態を継続的に把握する。

(4) 出穂期が早まっているため、斑点米防止のためのカメムシの防除適期を逃さないように留意する。特にクモヘリカメムシの多い中山間地ではコシヒカリ、ひやくまん穀の防除に留意する。出穂後7～10日と14～17日の2回の防除を徹底する。なお、防除後もカメムシの本田侵入が確認された場合は、さらに追加防除を実施する。

出穂後の除草はカメムシ類の本田侵入を助長するので、やむを得ず除草する場合は本田防除の直前に行う。

(5) 県内全域の全ての品種で、高温登熟となることが懸念される。

刈遅れによる胴割粒発生防止のため、収穫は収黄化率80%から開始し、85%までに終える。刈取り開始時期の目安は、登熟積算気温で早生900℃、中生980℃、晩生1,100℃とする。

(6) 今後も引き続き、気温が平年よりかなり高い状態が続くことが予想されることから、例年より刈取適期判断のほ場確認を早めに行うとともに、共乾施設等の稼働計画については、早生・中生・晩生の刈取適期を全て考慮すること。

2 大豆

(1) 現在、開花盛期となっており、今後、幼莢期にかけて、最も水を必要とする時期となっている。この時期の水分不足は、落花、落莢を招き結莢数が著しく減少するので、開花期から子実肥大期（9月中旬）に3～4日以上晴天が続いた場合、うね間かん水を行なう。

(2) かん水は日中を避け、ほ場末端まで水が達したら直ちに落水する。ただし、水量が十分でなく、時間がかかる場合には、土を入れた肥料袋等で溝をせき止め、畝ごとに通水するなどして、水口周辺の長時間の湛水による湿害を防ぐ。